案山子
二〇二二　冬・夏

新潟大学文学部

目次

案山子二〇二二　冬・夏号
案山子二〇二二　冬・夏号 3

目次
目次 7

二〇二二冬　お題作品『欺』
二〇二二冬　お題作品『欺』 11

辺獄 /鵜飼峰々子
辺獄 /鵜飼峰々子 15

二〇二二冬　通常作品
二〇二二冬　通常作品 27

お門違い /ひるかわこう
お門違い /ひるかわこう 31

二〇二二夏　通常作品
二〇二二夏　通常作品 37

禊 / 本間　丈治
禊 / 本間　丈治 41

かいそう /ひるかわこう
かいそう /ひるかわこう 45

仙郷淹遁記 /鵜飼峰々子
仙郷淹遁記 /鵜飼峰々子 57

奥付
奥付 71

案山子二〇二二　冬・夏号

案山子二〇二二　冬・夏号

案山子二〇二二　冬・夏号

目次

目次

目次

○冬号　お題作品『欺』
辺獄　　鵜飼峰々子

○冬号　通常作品
お門違い　　ひるかわこう

○夏号　通常作品
禊　　本間　丈治
かいそう　　ひるかわこう
仙郷淹遁記（せんきょうえんとんき）　　鵜飼峰々子

二〇二二冬　お題作品『欺』

二〇二二冬　お題作品『欺』

二〇二二冬　お題作品『欺』

辺獄 /鵜飼峰々子

辺獄 /鵜飼峰々子

辺獄

1

私(わたくし)の妹をお覚えでしょうか。日曜日の度にここへ杖をついて来ていた娘です。今年で十六になりました。お覚えでしょう。妹の日記には貴方様のことばかり書かれていました。神父様とどういうお話をした、神父様からどういう説話を聞いた、全て明細に記してあるので。

いえ、今日、私は妹に代って懺悔に参りました。妹の行いがイエス様の仰るところの罪にあたるものか、私の行いが贖罪にあたるものか私にははたして分かりませんが。

2

私の妹は、月並みな話ですが、幼い折から美しいものに目がありませんでした。昔、まだ二つそこいらのころ、前の代議士夫人に抱き上げられたとき、夫人は帯に着物に、大変美しい御格好でいらしたのですが、特にその帯留めが真珠の大粒なのを三つ繋ぎとめた形をしておりまして、妹は小さな手でそれをひしと掴んで、離しませんでした。幼いながら立派なる貴婦人だとみな顔を合わせて笑いました。冗談で済ますために。しかし、仮にその帯留めがイミテイションだったとして、しかし尚も乳白色のきらめきを湛えていたならば、妹はやはりその帯留めを掴んだでしょう。妹はそれが市場でどのような価値とか、どのような思い入れがあるとかに関わらず、ただ鈍く偏光を示すその色彩が綺麗だからそれを愛しました。現に、妹は精巧なイミテイションを与えられると上機嫌に過ごしました。セルロイド製の指輪のおもちゃが家にはいくつもありました。それが本物の宝石、本物の銀といっしょに宝石箱に詰めてありました。どれが真作か分からなくなったら、唇で触れて温度を見ていました。何につけてもそうです。美しくさえあれば贋作で構わないのです。絵画であれ、宝石であれ。

またある日、赤城大沼まで避暑に出たことがありました。大沼はカルデラ湖といって、四方を山の峰に囲まれたすり鉢の底にあり、夏場は熱気で淀み、大層暑くなりましたので、人々はよくボート遊びをしたものでした。その湖畔にはボートを繋いでおく桟橋が一つかかっていて、父が舟守に話をつける間、妹は水面を眺めておりました。夏の日で、ちょうど正午ごろでした。日傘の影はハッキリと正円に近い影を足もとへ落としていました。

私がふと桟橋から視線を外し、東風に合わせて戻した時、妹の姿はなくなっていました。ただ、子供の吐く小さな息のあぶくが側の水面に立っていました。私はすぐさま水に飛び込み、また父も飛び込みました。湖は淀み、ほんの一寸ほど先に妹の靴が見えました。私はそれを掴み、父は私の肩を抱きよせ、岸辺に強い力で引きつけました。私も妹も、泳ぐことができませんもので。妹は引き上げられてから、依然ポカンとして、こういうことを言いました。水面（みなも）に近づくと私の影は大きくなって、近づくほどにぐんぐん大きくなるものだから、いっとう大きいのを見てやろうと思ったの」その頃、確か七つほどでした。尋常に上がる年代の女の子がこんなので情けない、と父は叱りました。私も妹も、桟橋に脚を崩して、袖に薄く藻のようなものを絡ませ、髪から雫をぽたぽた落っことして聞きました。

3

ことに妹は勉強が不得意でした。私だって別段優秀なわけではないし、むしろ不得意の部類でしたが、それより余程だめでした。尋常にいた時分、四年生に上がってからいよいよ成績が振るわず、父の伝手で家庭教師をつけて朝な夕なに勉強して、やっと女学校に受かりました。当人としては「受かってやった」というのが正しいでしょうか。合格通知の速達が届いても、妹は一分も動かず、私が読んでやりました。その間もずっと、庭で猫と遊んでいました。

妹はそのころ、髪を結うとか留めるとかの装飾に興味を抱かず、髪はいつでもおかっぱの少し長いのを、そのままざんばらにしていました。黒い髪に地黒の肌に、そのうえ華やかな色の着物を嫌うものですから、夕暮れの中立っていると娘一人分の影が動いて、酷く不吉に、恐ろしく見えるのでした。

妹は女子が学を持つことに一瞥の興味もくれず、しかし依然として浅ましいほど美しいものが好きでした。歳を経るにつれ、それは笑いものにならない類の真実味を帯びるようになりました。もう親類のものは妹の耽美趣味を小さな貴婦人と笑うことはありませんでした。それどころか、妹がじっとかんざしや帯留めや根付などに視線を沿わせると、手や体の仕草でさっと隠してしまうのでした。烏が光物を集めるのと同じです。たとえ捨てもののかんざしであっても、烏にくれてやるのは癪でしょう。美しく着飾っても卑しさが目の端、指の動きから現れて、言葉にならない嫌な感じを覚えさせるのです。

成長につれて、妹は書斎に忍び込み、骨董品や奇書の類を盗み見るのを覚えました。そこで何を見つけたか、西洋の絵画や音楽や舞踊に格別の興味を持つようになりました。そのころ少女の間では少女雑誌を読むことが流行っておりましたが、妹は突然、その雑誌と、付録（便箋だとか、綺麗な多色刷りの葉書だとか）とをすっかり焚いてしまいました。評論家や、学校の先生方が見れば、殊勝な心掛けと喜ばれるかしれません。しかしながらそれは耽美行為への憧憬であって、例えば図画を描いた芸術家、曲を書いた音楽家の名前など、何一つ知らないのです。そのころ勉強したのも、女学校の音楽室や図書室見たさからかもしれません。

妹はそうやって書斎や蔵に立ち入った咎、また不勉強など様々な内容で父に叱りつけられていました。父の言うことは至極まっとうでしたので、妹は言い返すことなく、た

だその言葉を受け流すのばかり上手になりました。私も叱っておくようにと度々釘を刺されましたが、私がいざ何か言ってやろうととたんに家の中から影が消えて、ああもうやめた、と思うと途端に現れて、勝手口から上がりこんで夕飯の菜をつまんでいるのでした。

４

妹もとうとう女学生になりました。あの白線が二つ入った紺の袴に風呂敷包みを抱えて、毎日出掛けていきました。私は毎日弁当の菜などを拵えてやりました。

とはいえこのような時世ですから、娘たちが英語だの裁縫だのをやることはほとんどありません。竹で拵えた槍を手に取って訓練したり、それをやるほどの暇もなくなってきた時分には二、三人の組を作らせて、校庭で芋など作ったり、軍需工場の手伝いに行ったりしていたようです。それでも、毎日四時になると高楼から放課の鐘が鳴ります。まもなく、乙女たちは並んで各々の門を出て、南への長い坂を下って行きます。このあたりは南にお役所があり、その他立派な建物が城下に並び、そこへ背を向け北を見れば、地の果てに山があり、その麓までなだらかに、田、田、時折に畑。昔は樫など趣味の良い木がたくさんあったものですが、今では皆、丸太になってしまいました。そういう、寂しいところです。

乙女たちは南への長い坂を歩く間、わざと歩調を緩めます。友達との別れを惜しむわけではありません。普段、馬も牛も走って行くほどの道です。暖かな風が南から、おどろしく、砂を巻き上げて吹き付けます。乙女たちは涙を耐えて、歩調を互いにぶつかってしまうぎりぎりまで緩め、西を見つめます。あなたの、神父様のお姿が西の空の中に見えるからです。

夕日が麦畑を甘く照らし、葉の縁や、天使の睫毛のようなのぎに触れたものは、鋭い金色を作り、神父様のお姿は長い影に見えるのです。晩夏、麦の肥えるころは何もかも金色に見えましょう。その中で神父様が、木綿の開襟シャツに、腰に下げた手拭いを取って汗を拭われる――乙女たちが輪郭を見つけようと、潤んだ瞳の焦点を結ぶと、西日が痛くにじんで、その一帯は、赤く輝いて見えるのです。火事のように。

乙女たちの半分ほどはまだ学校に据え付けられた学生寮で暮らしておりましたから、やはり半分ほどの女子は神父様のお姿を見るためだけにその坂を下りました。可愛らしい不道徳だとは思いませんか。その羊のような乙女の群れに私の妹はおりました。

妹は月並みな娘でした。友達に連れられて教会見物へ行ったその日、神父様のお姿にすっかり惚れ込んでしまったのです。誰そ、聖人画と重ねていたのか知れません。

それにしても、焦がれつつも多くの娘が教会の麦畑の柵を越さないのは、彼女らがカソリックではないからでした。そもそも、あの女学校は花嫁学校のようなものでしたから、多くの娘には婚約者があり、見合い話がありました。幸せな一生の版図が大きく広げられた人生で、道ならぬ恋をしようとは誰も思わないのでした。ただ、徒花を愛でるように、戯れるように触れ合うのです。しかし、妹に人間的な理性や道徳は薄く、その魂を縛り付ける枷はただ芸術の恍惚ばかりでした。いえ、そこに芸術の恍惚がある限り、どんな罪を犯しても手に入れずにはいられないのです。妹は、何処からか古びた聖書を

手に入れると、神父様のミサに潜り込みました。

貴方様は妹に大変、良くしてくださいました。書斎に招いてくださりもしました。そこには貴方様の蔵書だの、仏像だの、素晴らしい芸術品がたくさんあったことでしょう。それにしても、乙女とは、その唇に触れずとも、いえ、頬に触れずとも人を恋しく思うものです。畢竟、妹はすっかり基教（キリスト）に惚れこんでしまったのです。

それからというもの、妹は父の目を盗んで教えの勉強を一生懸命にするようになりました。協会から讃美歌の楽譜を借りて写しを作り、時々小さな声で歌いました。この家には洋楽器の類はありませんから、その楽譜に描かれる音を再現することはできません。また、妹も簡単なドレミの音以外に楽譜を読むことができないのです。ですから、その楽譜そのものに実用的な価値はありません。その楽譜を飾り立てる可憐な薔薇、飾り文字を丹念に写し取っては、見惚れていました。

また、家には父の収集した様々な画集があり、その中でも西洋美術に関するものを枕元へおいて、あるいは食卓に持ちだして、頬杖をつきながら何時間でも眺めているのでした。私はあれを好きません。怖くて、怖くて――聖衣剥奪という絵では、イエス様の周りを槍を持った、具足姿の男たちが幾重にも取り囲んで、今にも着物を引き裂こうとしていますね。何が素晴らしいのでしょう。時々、妹は絵の風景について私に説明して聞かせました。ことに、嬰児虐殺という絵を好みました。ヘロデ王の命で、予言者が生まれたという村の幼い子供を皆、殺してしまう絵です。大昔は殺される赤坊の絵が一面に描いてあったどうですが、あまり惨いものですから、その姿を覆うように壺や豚の絵が描かれてしまったと――妹はそういうものを熱心に見て、どうにか手に入れた綺麗な紙をいくつも繋ぎ合わせて、模写しました。刃に暴かれる嬰児さえ描きました。そのころはいよいよ絵の具など手に入らなくなっていましたから、足りない色を混ぜ合わせて作って、それでも足りないので聖母様の着物は嫌な黄色に塗られておりました。

5

妹がいっとう綺麗な着物を着て（残っているものはさして多くありませんでしたが）日曜日、早くから出かけようとするのを呼び止めたことがありました。妹は悪びれもせず教会の礼拝だと言い、その聖歌や聖典がどんなに美しいか唱えました。貴方様の御教えくださった説法の一節を諳んじてさえみせました。

お爺様もお婆様も信心深い仏教徒で、今は故郷浜松に立派なお墓があるのです。「そのようなことに現を抜かしていては、死んで地獄に落ちるばかりではなく、お婆様お爺様に二度と会えなくなりますよ」と言って私は諌めましたが、妹は「死んでもいない人間に地獄の何が分かりましょうね」と言いました。「お前の言う天国だって、生きたものには知りえない世界でしょう」と言うと、「天国なんてこの世にもあの世にもありませんわ」と言いました。

「私はたとえイエス様がもう一度生まれることを約束しておらずとも、何ら奇蹟を起こさずとも、ただそれが愛しいから愛します。きっと聖書の書いたころ、イエス様は何ら私たちと変わらない凡人だったでしょうに、いえむしろ酷い父親だったでしょうに、それが弟子の脚色でかく絢爛な奇蹟、精密な予言になっていますね、でも私はそんな脚色

に騙されたりしませんわ、だって、何もできない厩戸の君だったころからずっと、人を惑わせた咎で斃されてさえ、あんなに可愛らしいのに」

私には親があり、先祖があり、家があります。嫁いだ家は無くなりました。私の良人は支那で死んだのです。形だけの結婚をして、千人針した鉢巻と、私の髪を持っていって、どこかへ落っことしてしまい、とうとう私は誰の物でもなくなりました。いよいよ危なくなってきたこの家を引き払い、この家で妹と、ヨネと、時折父と暮らしていました。父は後妻を招こうと考えていたようですが、私が邪魔らしく、実現はしませんでした。

貴方様にとって女を愛するということは、力をこめて抱きしめることでしょうか。口づけを寄こすことでしょうか。ともすれば、私の妹を本当の信徒にするように愛してくださったかもしれません。

6

妹はお肉が食べたいと時々言いました。昔から肉、特に牛肉を焼いたのがなによりも好きでした。夕飯にビフテキなどが出ると、可愛がっている猫に一切れくれてやって、その喜びを分かち合うのでした。もうとてもお肉など手に入らなくなっても、寝言のように、ぽつんと言うのでした。他にも絵の具がない、綺麗な紙がない、私に聞こえるほどの声でそう言って、暇がありませんでした。

ある日、女学校でそういうことを言ったのでしょう。頬を真っ赤にして帰ってきたことがありました。縁側に座り、袴を捲り上げた素足を夕方の空気に晒していました。まだ女学校一年の、秋のことです。猫はもうありませんでした。餌をやらなくなってしばらくして、どこかへ行ってしまいました。他に妹に優しくしてくれるもの、例えば女中のヨネはそうやって拗ねているのを見ると、お菓子を出してご機嫌取りをするのが常でしたが、そのころいよいよ食べるものに窮し、自分たちのことで手一杯になったので、家へ帰しました。庭にはいろいろの果樹がありましたが、もう青い柿が生っているのしかありませんでした。別に何が欲しいとか何が足りないとか言わなければいいものを、わざわざ口に出して、打たれるのは愚かしいことです。

妹はその晩、私の部屋にやってきました。十一時過ぎでしたが、私は常の不眠症を酷くして、その日も起きていました。普段であればヨネが面倒を見ていたでしょうが、仕方ありません。

私も妹も他人の顔を正面から見るということを好かないので、妹は揺椅子にかけ、私は寝台の上に体を起こしました。電灯を点けると、入り込んだ蛾がぶつかって、ぱちんぱちんと音がしました。

女学校の手洗の側で、少女が二人接吻していたのだと妹は壁の方を見ながら言いました。誰そ兵隊さんに与えたのでしょう、髪はどちらもおかっぱで、片方の背が二寸ほど高かったと付け足しました。

それが男女のそれの真似事であるなら、それほど醜悪なものはないなと思いました。乙女とは女が長く年老いて死んでいく間、一瞬だけの完璧な造形であって、男の代わり

にするには惜しいと思いませんか。しかし、彼女たちが一心に互いを思ってそれをなしたとして、それは一般の感性に照らし合わせて不道徳なのですが、私はいっこう咎める術を知りません。私は沈黙しました。まもなく妹も部屋を出ていきました。

7

妹は目を悪くしました。視界が暗いというので、夜盲症の類かと、苦労して手に入れた魚などを食べさせていたのですが悪くなるばかりでした。視界の真ん中にインク染みのような黒い点が出来て、それが次第に大きくなるのだと言いました。物が見えづらいと言い出してから、私が毎日送り迎えをしていたのですが、次第に学校の教えることが何一つできないほどになったので、学校へ行くのを止めました。

妹にとって、普段眺めていた絵画が眺められず、一人では聖書も読めないのが相当に堪えたようでした。普通、絵画などを眺めるときは一番見たいものに視線を向けるものですが、妹の場合はむしろ見つめるほどに見えなくなるのです。

その代わり、私に聖書の気に入った節を読ませました。それは、暴君ヘロデが村に生まれたという救世主の予言を聞き、子供を一人残さず殺してしまう場面でした。妹はそれがどの節のことで、以降どのように展開されるか隅々まで覚えているのでした。

私はあれを好きません。今生きていて、十分に苦しい人はたくさんありますけれど、基教の誉めそやす辛苦はその首をもっともっと苦しく絞めるのに都合がいい。言い訳ですわ。あんなの、見殺しと変わりません。貧乏に窮する者、病に苦しむ者はそこらへんに打ちやって、やがて死んで初めてお名前を呼びますでしょう。犬と変わらないではありませんか。

私が聖書の音読に手を抜いたり、句を違えたりすると妹は酷く怒って、私の方向に向かって闇雲に拳を振るいました。私がどうにか逃げても、その衣擦れの音で位置を悟って、いっそう酷い打擲を加えてくるのです。

しかし、目は日に日に具合を悪くしていきました。それは報いだと思いました。いい気味だとさえ思いました。いかなる信教においても嘘をつくことは罪でしょう。あれは背教です。鞭うたれる主を、火に焚かれる聖女を愛するかの娘は、神も仏も信じておりません。畢竟、美しいものを握りつぶすことでしか快楽が得られないだけです。

私は父と相談して、日中の間、寺院にあずかってもらうという約束をしました。そのころ私は付き切りで面倒を見ておりましたが、毎日打たれるのですっかり気が参ってしまったのです。私が初めて神父様にまみえましたのも、この折のことでした。無論、寺院とは例の教会に他なりませんが、父の目を逃れるのにはそれで十分でした。そのころ妹は杖があれば慣れた道を行き来できるようになっていましたので、自分でやりました。妹はパンをこねたり、麦の殻を外したり、そういった作業をことのほか気に入っているようでした。貴方様は妹の目を神様が与えられた辛苦と仰いました。防空警報が鳴り、壕に入って、そこから出ていくときに神父様の御手を借りられるのが、いっとう好ましかったようです。

私は夜毎に聖句の練習をする声を聞いていました。貴方様の御教えくださった聖句です。七つの娘が両手を固く結び、ベッドランプの下に本を置いて、一節ずつ読んでいる。

私と妹が一緒の部屋で寝ていたのは私が十二になるころまでですから、その姿を浮かべるたびに幼くなってしまうのです。おかしな話ですが。深くご柔軟、深くご憐愛、この世に甘くまします我らが御母マリア様――すっかり覚えてしまいました。

8

八月五日、空襲警報が鳴って、今度は本物の空襲が始まりました。およそ前橋の飛行場や、軍需工場を焼きに来たのでしょう。夜九時過ぎのことでしたから、私も妹も二階の私室で眠っていました。妹を起こすと、玄関先の行李を取って壕に入りました。ところが、落ちてくるのは焼夷弾で、あたりの家がところどころ燃え上がり始めましたので、いよいよここにいては焼け死ぬと悟り、建物のないところへと逃げることにしました。

夜ではありましたが、四方に燃える家があったので明かりには事欠きませんでした。妹はすっかり方向の感覚を失って、しじゅう見当違いな方向へ行こうとするので、そのたびに袖を引っ張りました。途中でどこかの婦人会の奥さんに頭から水を浴びせられました。

ようやく郊外へ出ました。ただ茫々と田畑があり、私たちは長く走ったもので、すっかり疲れてしまいました。時々猫車が家財などを積んで、道を走っていくものですから、私たちは道を譲って、あぜ道を歩きました。爆弾は家がたくさんあるところへ落ちるようで、住宅地と住宅地の間のここは奇妙に静かなのでした。

私たちは道端の樫の木の下で休憩することにしました。他に、逃げてきたらしい夫人が一人、子供が一人座っていましたが、互いに疲れ果て、子供は眠っていました。

妹が、寒いから着物を乾かしたいと言い出しました。つまり、遠方の火事を薪に休みたいということでした。私はそれに応じ、北へ向かうことにしました。

遠くには何条もの煙が、その遠くには煙が編まれて大きな幕になったものが、もうもうと空を埋めていました。しじゅう、風に乗って灰が流れてきました。濡れた着物がいよいよ重く、息苦しいほどでした。街灯はひとつもありませんでしたが、明るい夜でした。

私たちは小さな薪のようになった、井戸の残骸で温まりました。外れにあるもので、もう半分灰になっていました。そこで何時間か休んでいると、妹が何やらもごもごと口の中で何か言っているので、問いただすと、教会のほうを見に行きたいといいました。私は妹を立たせると、再び歩き始めました。

9

というのも教会は、前橋の役場城下のいわば外縁にあったので、空襲を逃れ、避難民に施しをしている可能性もあったのです。

私たちはしばし歩き、教会へたどり着きました。教会は僧侶の生活する宿舎、麦などをしまっておく倉庫などいくつかの部分に分かれ、生憎宿舎も倉庫も焼けていましたが、礼拝堂は宿舎の瓦礫を被ったほか、およそ無事に見えました。神父様方は避難されたとみえ、敷地の中は無人でした。

妹は、畑はどうかと尋ねました。私は裏手へと向かいました。

教会の裏にはいっとう大きな麦畑があり、それに付随して豆や葡萄などの棚が備えてありました。畑に麦は孫生(ひこば)えひとつ、落ち穂ひとつあらず、土肌が生々と光りながら転がっているばかりでした。私は妹を屈ませて、その刈跡に触れさせました。

私は急に酷いセンチメンタリズムに襲われて、妹をその場に突き倒してやりたく思いましたが、ほとんど盲に近い妹が、芋虫のように手を動かしているのを見ると、そういう気も失せて、しばし妹の背中を眺めていました。

「あのね」と妹が言いました。「美しいもののない世界に生きている価値はないけれど、せめて死ぬ時くらい、美しいものを抱いて、一緒に地獄で焼かれたいと思うの。あの御方は天に召されるから、連れてはいけないわ。ただ惨く、犬のように死ぬ。私は浅はかな女だけど、それが私の運命だということだけは分かってよ。ねえ、私、この畑をすべて燃やそうと思っていたの。まだほんの少しだけ見える目の端で、きらきら光る畑を見たかったの、けれど、ねえ見て、全部この寒い夜に飲まれてしまったようじゃない――神父様はいつものように、この畑には麦がいっぱい実っていると言ったのよ――」

東の空には、ベツレヘムにあるような、いっとう綺麗な星が、煙に負けずに輝いておりました。私の袂を、妹は泥だらけの指で掴みました。

「神父様はどこ」

私は教会の柵をぐるりと回り、燃え跡や瓦礫をひとつずつ触らせて回りました。礼拝堂の一部は既に焼け落ちていましたが、しかし八分ほどは残っていました。

妹は礼拝堂の壁を手繰り、玄関口に掘られた天使様の像に触れ、笑いました。それから、懐からマッチを取り出し、擦りました。木の壁が黒くくすぶって、火が消えました。壁を触ってみて、「私、油が欲しい」と言いました。

そこここに焼けて、柱だけになった家がありました。ある家の勝手口から油の壺を見つけ出し、妹に触れさせてやると、妹は喜びました。私がそれを運んで、中身をうち撒いてやると、妹は油に指を触れ、位置を見てからマッチを落としました。

お堂の天辺にはメッキした十字架が立ててありましたから、アメリカの兵隊さんは火口を向けませんでした。焼いたのは私と妹です。火がよりかかって、大きくなって、金色の光を噴き出しながら焼きました。葉書ほどもある大きな灰がゆっくり落ちてきました。まもなく梁が落ちました。マリア様の首が落ちました。麦畑を囲うような水路には、人の体が斃れていて、時折その輪郭を火が撫でました。昔はこの一帯が麦畑でした。夏になると金色の絨毯がそよそよ風に揺れるのです。雀が時折ご飯を食べに降りていくと、その姿がふと波間に消えるのです。溺れるようでした。

私たちは普段、手を繋ぎませんでした。妹が随分目を悪くしてからもそれは変わりませんでした。触れたところの熱が交換されて、薄く油が溶けるように痛覚が曖昧になるのが嫌だったのです。妹は私の袖を掴み、私は拳を握りました。しばらくの間そうしていました。本当はずっと、妹のことが羨ましかったのだと思いました。

10

壕に帰ったのは東の空がわずかに白むころでした。すっかり日が昇り、私が目を覚ますころには妹はどこかへいってしまいました。昨晩から何者かを探す人が外をふらふらと歩き、その歩調が書く線は決して交わることがないのですが、最早私もその群衆の一人

なのでした。正午ごろまで妹を探しに外を歩いて回りましたが、川に折り重なって浮かぶ人、道端で焼け死ぬ人、どれであるかの見当もつきません。どこかで鐘が鳴りました。

私は焼けた屋敷の跡へ向かいました。南に向いた応接間、広間の類はことごとく焼け、北向きの、タイル張りで作った台所や風呂が陰鬱に焼け残っているのでした。

庭に猫を見ました。口許にはぼろ雑巾のような子猫を咥え、櫟(いちい)の木の隣を歩いていました。子猫は死んで、しかし妹の可愛がったその猫に似た鯖色の毛並みをしていました。血があちこちに汚らしく凝固していました。私はその猫が雌猫であることを初めて知りました。猫は私を見て、しかし急ぐとか隠れるとかいうことをせず、歩いて裏の門から出ていきました。殺してしまうのなら、初めから産まなければいいのに。

妹の置いていった風呂敷包みには聖書と、日記帳と、何枚もの絵が入っていました。妹は本当に良い物を手に入れると、誰にも教えず独り占めにするのが癖でした。日記帳の中身は日記というより、膨大な量の詩と歌と、そのなりそこないの集まりでした。私はそれを読んで、初めて神父様が何者であるかを知りました。

麦畑の絵がありました。説教をなさる牧師様の絵がありました。特に分厚い画用紙には、女のそれより一回り大きい手が赤黒く、血で描かれていました。もはやほとんど物が見えず、絵の具など手に入らない妹にとって、その他に絵を描く手段はありませんでした。私はその手は神父様のものだと直感しました。

三日ほどして、妹の名前を小学校の死亡者名簿に見つけました。小学校の校庭の樫の木に首を括って死んでいました。それはただ文字の羅列として見ただけで、具体的に死体がどこへ行って、どうなったかは知りません。この壺はただ慰みに持っているだけで、中身は着物の布が一枚入っているばかりです。なにせこうも暑いものですから。蛆がわくと困るので、顔のあるものもないものもいっぺんに燃やしてしまいました。校庭を西へ出ていった先のなだらかな丘からは、一日中白い煙がもうもう上がって、酷い匂いがしました。

11

今日はただ、この杖を取りに来たのです。あの日、ここへ打ちやっていったので。妹の形見はこれで全てです。私は罪深い人間です。このように懺悔の形を介するほか、尊い身分の御方のお耳に触れる機会はとんとございません。この口をつく言葉は雄弁の銀にまったく遠く、理知の光に弱く、それを弄ずる私にさえもすべて他愛ない嘘に思えます。それでは、私はそろそろお暇いたします。さようなら。

了

二〇二二冬　通常作品

二〇二二冬　通常作品

二〇二二冬　通常作品

お門違い /ひるかわこう

お門違い /ひるかわこう

お門違い

それはたぶん気まぐれだった。

彼は小さな箱庭を管理していた。その世界の全てを彼が管理する箱庭だ。すこしの人間が住む小さな街のような箱庭だ。はじめはいっぱいいっぱいだった彼の箱庭経営だったが、今は少しの余裕が生まれ始めていた。

彼は手腕が良かった。すこし足りない程度に、それでも快適に安全なインフラを整えるだけして、あとはそれなりに住民たちに任せていた。自然の摂理なので、犯罪も悪行も許容した。しかし、あまりに道を外れたり、平和な日々が崩れそうなら少してこを入れたが、その程度にとどめた。彼は何もその世界の全てを支配欲のもとに人々を飼っているわけではない。美しい箱庭で、少ない人々だけでも穏やかに、幸せに暮らしてほしかった。

そんな理念の下で作られた箱庭は、上記のようなやり方でおおむね成功していた。それに満足した彼は、もう少し住民の意見を聞き入れてもいいのではないか、と思っていた。加えて彼は人々が、行き場のない願いを、欲望を心の内に秘めていることを知っていた。そしてその欲望たちが、時々あり得ない暴走を起こして箱庭の平和を予期せぬ形で崩していることは、悩みの一つだった。そこから、人々のその欲望をいい感じに昇華させればいい、という考えに至るのに、そう時間はかからなかった。

皆が幸せになるならきっといいことに違いない、と彼はすぐにとりかかった。しかしさすがに何もかも叶えるわけにはいかない。この箱庭の平和を維持できる範囲内で、些細なものなら反映させよう、ということにした。

彼は街外れの小さな、閑古鳥の鳴く神社に目を付けた。面積が狭いので、外の世界で言う都道府県の概念は此処にはない。せいぜい申し訳程度に区に分かれているのみだ。その中の中央区の端、東区との境にある古びた神社に目を付けた。広く人々の意見を聞き入れるために、それなりに交通の便が良く、地方の人も訪れられるように。彼は突然の思い付きでもそれなりに詰める男だった。もっともそれだけであればこんな隅っこの神社である必要はない。これは、あまりたくさん来られても大変だ、という彼の事情からであった。

彼は今でも常に箱庭の大体を見ることが出来たから、新たな設備はいらない。そこは意図的に死角を作っている場所ではなかった。こうしてひっそりと、願いが叶う神社が誕生した。

彼がそれを思いついてから三日後、その神社に一人のおばあさんが現れた。いつも連れている犬がいないが、散歩の途中のようだった。おばあさんは人気のない神社に賽銭を投げ入れると、願った。さっそくだ！　と彼は浮足立った。高性能なマイクは、ほぼ声の形を成していないかすかなつぶやきも完全に拾うことが出来た。
「……タローが元気になりますように」
タローがそのおばあさんの飼い犬だということを彼は知っている。そしてタローが原因不明の病でぐったりしていることも。彼は少し思案して、獣医をひとり彼女の家に向かわせることにした。おばあさんの友人の友人が獣医なので、前者の耳にそれとなく吹き込んでおいたのだ。後は善意の行動を待つだけ。友人に促されて受診したおばあさんは、無事タローに適切な治療を受けさせることが出来た。
彼は気を良くした。こんなものだ。神のような力はなくとも、少し離れたピースをつなぎ合わせるだけで、願いをかなえることが出来る。そうして住民たちを幸せにできれば万々歳だ。
それからも彼は、その神社に持ち込まれた些細な願いを叶え続けた。「落し物が見つかりますように」「好きな子と同じクラスになれますように」「懸賞に当たりますように」――。もっとも、「受験に合格しますように」とか「告白が成功しますように」とか本人の努力が必要なものは出来る限り本人の努力を促す形で、はたまた「世界が平和になりますように」なんてものは完全に叶えてしまってはどうしようもないので、多少犯罪率を減らすとか、明るいニュースを多くする程度にとどめるところで手を打った。しかしおおむね順調であった。彼はますます気を良くした。
そんな事をかれこれ三か月ほど続けていた。二か月を過ぎたあたりから、神社に参拝する人が増えてきていることに、彼はちゃんと気が付いた。そしてそれが「この神社に願ったことは叶う」という噂のせいだということは想像にたやすいし、実際そうだった。
小さなことでも、人の噂の巡りは中々侮れないものだ、と彼は感心した。しかしそれのおかげで閑古鳥の住処であったその神社は活気を取り戻したので、彼は特に重く考えなかった。むしろ、全てがうまく回っていると確信した。しかし願い事の母数が増えるにしたがっておかしなものも増えてきたようには感じたので、そういったものには耳を傾けず、些細な願い事だけを叶え続けた。よくもこう願いが尽きないものだ。ため息交じりに感心して、ラムネを口に放り込んだ。

次に彼が違和感に気付いたのは、それからまた二か月ほど後だった。彼は箱庭の全てを閲覧することが出来るが、そこの SNS に陰謀論のようなものが増えていると感じた。ダークウェブのような、いわゆる隠された（と人々が思っている）世界の動きも活発になっていた。内容は一貫してこうだ。「私たちが住む世界は、誰かに管理されているので

はないか？」以前から幾度となくささやかれているものであり、その度に胡乱だと多くの人々に取り上げられないでいた。それが今活発化している。社会が不安定になっているのだろうか。意味もなく人々を不安にさせるし、おまけに好ましくない。彼は少してこを入れた。

そのすぐあと、暴動が起きた。何人かの市民が徒党を組み、プロパガンダを行った。これは彼がもたらした敵ではなかったため、予測が難しく、少し驚いた。あんまりやられると都合が悪いので、いいタイミングを見計らって警察を向かわせた。彼らも言いたいことは言い切ってそれなりに満足しただろう。そう思ってスクリーンから目を離す直前。連行されていく暴徒たちのリーダーの青年と、カメラ越しに目が合った気がした。

そこからはまた、今まで通りの日常が訪れた。それでも、彼は少しだけ監視を強化し、例え深夜でも、ささいな知らせで飛び起きた。そのうち、箱庭の敵は、彼がもたらしたものではない敵ばかりになっていた。人々の思想に悪影響を与えるものは放ってはおけず、見つけ次第すぐ手を打っていた。気付けばラムネは一日に一袋が消費されるようになっていた。

少しして、箱庭のシステムに違和感が生じるようになってきた。最適化された最小限のシステムかつ常時自動的に稼働するトラブルシューティングツールも完璧に備えてあるとはいえ、箱庭の管理者は彼一人だ。段々と手が回らなくなっていって、それのみに追われるようになった。彼は優秀な男だったから、それでも最低限の管理は怠らなかったが、それだけではもう、どうしようもなかった。どこを見ても、赤、赤、あか。そろそろ気が狂いそうだった。もう狂っていたのかもしれない。彼は箱庭を手放したくない一心で動いていた。どかんと背後で音がした。そこには見覚えのある顔があった。かのリーダーだった。

お前を殺しに来た、と青年は言った。これで自由だ、俺たちは自由な世界に出る、と。

その言葉たちは、自身の心音と呼吸音のせいで彼の耳にはほとんど届いていなかった。代わりに、彼は引き攣ったように口角を持ち上げて、心底困惑して尋ねた。

「今君たちの手元に幸せがあるじゃないか。どうしてそれを自ら手放そうとするんだい」

僕はただ君たちに幸せに生きてほしかっただけなんだ、そう続けた彼に、青年は言った。

「俺たちの幸せにお前のような存在は不要だ。少なくとも俺は、お前がいなくなるだけで幸せになれるよ」

そうだ、神社に願っておけばよかったかな、という青年の言葉を聞いて、彼は自らの失敗を悟る。鋭く息を飲んで、止めた。喉の奥から震える息を吐きだして、肺が空になったら嗚咽して、彼は嘆いた。

二〇二二夏　通常作品

二〇二二夏　通常作品

二〇二二夏　通常作品

禊 / 本間　丈治

禊 / 本間　丈治

禊

生暖かい緑の香り。生い茂る植物の中で私はうんざりするような太陽に見守られ、私の穢れから目を逸らす。置いてある椅子には座らずにそのまま庭に寝転がり本を読む。いつもの日課になってしまった。私は子供の頃から忘れたいことがある時は家の庭で本を読む。現実を見ないために。もう何ヶ月目だろうか、どうしようもないのかもしれない。いつものように文字を追いかける。紙をめくる音だけが聞こえて、私は草木と変わらない。心臓の音は聞こえない。私の中の人間が薄れていく。

小説が半分を過ぎたころ、私は本を胸の上にのせて意味もなく顔を傾ける。左の頬にひんやりと湿った土があたる。赤く微笑むカラジューム、醜く性器のように口を開けた食虫植物があの日の私と重なる。思い出してしまった。私はそっと顔の向きを戻し、揺れる葉の隙間から雲を眺める。雲は風に吹かれてゆっくりと流れている。鼓膜を揺らす葉の細流。気分は徐々に落ち着いて、自然と瞼を閉じる。耳を塞ぎたくなるような音が一切無い家の庭。本の続きを読もうとした時、少し違和感を覚えた。いつもこんなに静かな場所だっただろうか。いくら広い庭といっても耳を澄ませば車の音くらいは聞こえていたはずだ。私は椅子に掴まりながらゆっくりと立ち上がり辺りを見渡す。虫たちの声がしない。飲み込まれてしまうような緑の中、背中を舐めるような風が吹いた。いつもの風景を願いながら道路に出るが案の定車は一台も通っていない。辺りを見渡しても人の気配どころか生き物の気配すら無い。ただこの世に私一人が取り残されて、形骸化した街が私を憐れむように見下ろしている。私がどこか別の世界に放り込まれてしまったのだろうか。それとも私以外の生き物のほうが忽然と姿を消してしまったのだろうか。考えても当然のように答えは出てこない。ただ空は晴れている。

どれくらい立ち尽くしたのだろう。私は目的も無く見慣れた街を歩き始めた。何もしなければ私の存在も消えてしまう気がしたから。マンションのベランダを見上げて覗くと、何個か服や下着が干されている。もちろん持ち主はいない。これは私に対しての盛大な嫌がらせで、みんな自分の家に隠れているのではないかと考えたが、三件目の不法侵入でその可能性はないという結論に至った。また街を歩き始める。いつの間にか高校の通学路に着いた。両側を家に囲まれた騒がしい坂道、しかし今はベビーカーを押す母親も会社に向かう大人もいない。庭から溢れる植物や日光に反射された標識がいつもより少し眩しく見える。そのまま坂を下り、昔通っていた小学校に向かった。いつもなら無邪気な声が聞こえてくる時間帯だ。フェンス越しに遊具を見て、少し先の未来を想像

する。静かに佇む彼らを見て目の前のフェンスを握る。金属のきしむ音が均等に広がっていく。そうだこの世界には私しかいないのだ。蝕まれるような恥辱に苛まれることもなければ、粘りつく優しさに涙を流すこともない。静寂が約束された辺りを見渡す。庭から出られる。あんな想いを抱えたまま本を読むのも限界だった。忘れられるかもしれない。湧き上がる期待は学校に歩を進めることに躊躇いを持たせなかった。踏切を抜けて裏道を歩く、いつも通っていた道だ。できるだけ人に会わないための道。近づくにつれて額に汗が滲み、胃液が逆さまに流れ出る。コンクリートに広がる自分の吐瀉物を見つめる。結局は錯覚だった。ついさっきまでの気持ちは泡のように弾けていく。校門の前に立つ。心臓の音が鳴り響く。私の中の人間が顔を出す。

いつの間にか階段を歩いている。窓の外から夕日が差し込んで私の顔を照らす。こんなにも時間が経っているのに気付かないなんてどうかしている。一段一段が私の行動を止めようとしているのだろうか、足が掴まれているように重い。本当は分かっていた。ここに来たからといって、彼らがもういないからといって私は逃げられない。この体に穢れがある限り。屋上の窓を開ける。鍵はかかっていなかったが長い間開かれていなかったのだろう。錆がこすれるような音がする。太陽が半分沈み空は明かりを失いかけている。夕暮れ、真っ直ぐに終わりへと向かう。一つ呼吸をしてそっと瞼を閉じる。消え入る声で我が子に話しかける。

「私はあなたを愛せません。生んであげられなくてごめんね」

太陽は彼女の結末を看取り静かに沈んでいく。

かいそう /ひるかわこう

かいそう /ひるかわこう

かいそう

夏休みに入ってすぐのこと。大学二年生である桐野冬真（きりの とうま）の携帯に、顔も思い出せないような高校時代の同級生から連絡が入った。
『中野、失踪したらしいけど何か知ってるか？』
冬真は、これを見るなりひっくり返った。中野、というのは中野蒼（なかの あお）という男のことだ。小・中・高と同じ学校に通った幼馴染のような存在で、一番の親友だという自負がある。どういうことかと焦って連絡を返すと、どうやら連絡してきた彼は蒼と同じ大学に通っているようだった。学部が違うため目立った関わりはなかったが、蒼のいる学部に友人がいるらしく、その人経由で知ったようだ。迷った末に、一番仲の良かった冬真なら知っているのではないかと思い、連絡したとのことだった。冬真は急いで液晶に指を滑らせた。
「失踪したなんて今初めて聞いた。いつから」
『二週間前くらい。どの講義にも出なくなって、バイトにも来てないらしい。連絡もつかないみたいでさ。桐野が知らないならもう誰に聞いても分からないか』
冬真はその通りだと思ったし、だからこそ悔しかった。大学生になっても定期的に連絡は取っていたが、そんなに頻繁というわけでもなかったから、些細な変化に気付けるはずがない。そして何より心配だった。ただ頭の隅にはどこか冷静な自分もいて、このまま話しても埒が明かないだろうということは分かっていた。
「とりあえず、こっちからも連絡してみる」
そう送って会話を強制的に打ち切る。そしてメッセージを送ろうとして手を止めた。いきなりこの話題を切り出していいものか迷ったからだ。二十分ほど考え込んで、冬真はこう送った。
「最近どう」
簡潔な一文だった。正直なところ、何となく彼と連絡はつかないと思っていたし、どうせ見られることもないだろうと思ったゆえのものであった。そのため、冬真は送った直後にアプリを閉じた。しかしそれとほぼ同時に、軽快な通知音が流れた。
『聞いたんだ？』
自分の背に冷汗が伝う感覚というのを冬真は生まれて初めて味わった。スマホを持つ左手は震えていて、少しの物音でもあればとり落としてしまいそうだった。
「聞いたんだ、って、お前今どこにいるんだ」
『実家ではないけど、そんな感じのところにいるよ』

「お前大学で失踪したことになってるぞ、連絡の一つくらい返せ」
『連絡きてたんだ、いろいろ忙しくて気付かなかった』
「この速さで返しておいてそれは無理があるだろう　本当に何やってるんだ」
　一瞬も途切れることなく、およそ二，三分の間やり取りを交わした後、そこで返信が途切れた。ただ、既読はついている。返信に迷っているのだろうか、何か言えない事情があるのだろうか。怒涛の展開の中、冬真の頭の中は真っ白だった。それでも彼を捕まえたこの期を逃したくなくて、携帯を握りしめて返信を待った。
　そして次に画面が動いたのは、そこから約五分後だった。
『じゃあ、こっち来なよ』
　は、と思わず声が出る。さらに息着く間もなく彼の所在地と冬真の大学周辺からの交通手段の一覧表が送られてきて、また背に冷汗が伝った。彼は返信を悩んでいたのではなく、これを調べていたのだ。
　それ以降、何を送っても既読がつくばかりで返信が来ない。そして相変わらず冬真以外の人間は連絡さえつけられない。この男にはこれ以上話す気がない。
　冬真はため息をついた。

＊

　高速バスから降り、駅で久々に顔を合わせた友人は、記憶の中より随分こざっぱりとしていた。ぼさついて目元に影を落としていた黒髪はブルーブラックに染められ、全体的にやや短めに切りそろえられていた。そんな高校時代の親友、蒼は少し眉を下げて、大人びた笑顔を冬真に向けた。
「久しぶり、冬真くん」
「……久しぶり」
「元気ないね。大丈夫？」
　冬真は、誰のせいだと悪態をつきたい気持ちをぐっと堪えた。一見朗らかに見える会話の裏に、独特の緊張感が漂っている。お互いそれを感じていた。
「色々聞きたいことはあるが、とりあえず今日はもう休みたい。積もる話はそれからだ」
　蒼は一瞬何か言いたげな顔をしたが、直後明らかに安堵を滲ませ、優しく言った。
「うん、そうしようか。ちょっと暑いしね」
　コンクリートに囲まれた中心街では、吹き抜ける風さえもぬるい。冬真は頷いた。

　そうして駅から一時間ほど車に乗せられ案内された彼の実家は、木造建築平屋建て、古い作りの一軒家だった。その家には他に人がおらず、家財道具もほとんどなかった。空っぽという言葉がふさわしい。三十五℃を超える天気にも関わらず、家の床はひんやりしていて、冬真は靴下越しにも関わらず驚いて一瞬足を浮かせてしまった。
　廊下を抜け部屋に入ると、エアコンの風が吹きつけてきた。急激に汗が乾いていく感覚に冬真は身を震わせた。
「はい、お茶。何もないけれど、ゆっくりしていってね」

「お前はおばあちゃんか。でも本当に何もないな。お前、こんなところで何してるんだ。大学の奴が心配してたぞ」
「まあまあ」
　蒼は妙に機嫌を良くして、踊るようにステップを踏み、冬真の正面に腰掛けた。笑顔が少しの気味悪さを感じさせた。
「せっかくこんな辺境まで来てくれたんだから、少しくらい楽しんでいってよ」
「来てくれたも何も、来ないとお前が喋ってくれないからだろ」
「そう。冬真くんは僕の我が儘に付き合ってくれたんだよね」
　記憶の中の彼そのもののようで、淡々としすぎているその語り口は冬真の調子を狂わせるのに十分だった。蒼の意図を汲み取れず、押し黙ってしまう。彼はこんな人間だったかと自分に問いかけてみても、答えが返ってくることはない。
「だからもう少し、ここにいる間だけは、このまま付き合ってよ」
　強いて言えば、これが答えだった。冬真は甘さを自覚しつつも流されざるを得なかった。
「何がしたい」
「冬真くんが帰るまでの二日間まるまると少しの間、僕に頂戴。一緒に遊んでよ」
　そもそもここに呼び出されている時点でお前に時間をあげているようなものだけどな、という冬真の呟きは、嬉しそうに無視された。

＊

　適当な朝ごはんを食べた後、蒼は折角だから家周辺を散策しよう、と言い出した。ノーと言っても無駄なことを冬真は昨日までのやり取りで分かっていたので、無感情のまま頷いた。彼が先導するのについて行きながら、周辺をただ歩き回るだけだ。広がる田園風景、錆び付いたシャッター街を抜けていく。あまりにも田舎なので、冬真にとっては物珍しく、意外にも楽しんでしまった。
　中でも、それなりに大きな商店街のとある店の前で、蒼が声を上げた。
「ここ、いちご大福の店なんだよ」
　視線の先はこじんまりとした和菓子屋だった。ここの店主は蒼の母親の同級生が一家で営んでいるらしい。中でも春に決まって売り出すいちご大福がおいしいと楽しそうに言った。
「毎年おばあちゃんが人数分買ってきてくれるんだ。さすがにもう時期は終わってるけどね」
「そりゃそうだろ、八月だぞ。俺のとこはもう夏休みだからな」
「そう、早いんだね。いいなあ」
　それを聞いて、冬真は彼の失踪を知った際のことを思い出した。どうやら蒼の通う大学は現在期末試験の真っ最中らしく、時期も相まって心配されていた。基本的に成績優秀でまめな蒼だから、試験をすっぽかして単位を落とすなんて勿体なさすぎる、とも。今の口ぶりから蒼はそのことを分かっているはずだが、なぜこんなところにいるのだろう

か。問い詰めたところで躱されてしまうだろう。
　何か買っていこう、と促されるまま店に入る。すぐに冷蔵のケースが出迎え、その上に常温のお菓子が並んでいた。個人で営んでいる店だけあって商品の数もさして多くない。二人が入ってくるのを見て奥からいそいそと中年の女性が出てきた。店主の奥さんだろう。冬真はすこし会釈をして並ぶ菓子を見た。暑さが体に堪えていて、あまりものを食べる気にもなれない。かろうじて食べやすそうな葛切りを買うことにした。
　ゆるりと歩く。商店街にはそれなりに車通りと人通りがあったが、家の方向に戻るにつれてどちらもまばらになっていった。ついに歩道が整備されていない道に出るが、そのまま歩き続ける。どうせ車道にはみ出しても誰にも怒られやしない。少し進めば陸地が途切れてしまうこんな辺境では、些細な法は無いに等しい。
　家に着くと、再び涼しい風が出迎える。葛切りはぬるいから冷やしておいて後で食べよう、なんて楽しそうに言う蒼を横目に冬真は座り込んだ。じりじりと日に焼けた肌が熱を持ち、赤くなり始めている。坂が多かったため、足も結構きつい。蒼は冬真のそんな様子に気付いているのかいないのか、にこにことアイスを差し出しながら言った。
「ちょっと向こうの方に灯台があるんだ。海が近いから。明日はそこまで行こうと思うんだ。この町全体が見渡せていいと思うよ」
　冬真は勿論頷いた。

＊

　翌日。今日は風が強い。視界の端の白波を横目に見て、二人はスマホの案内に従って進む。どうやら、トンネルを抜けねばならないようだった。
　普通自動車がギリギリ二台すれ違えそうな狭くて小さなトンネルの中は、陽の光が遮断され、湿気が溜まってひんやりとしていた。細すぎて意味を為さない白線を右足で踏みながら歩く。
「ジブリの世界観だね！」
　そう言ってくるくる回りながら先を行く蒼の声が跳ねていた。そういえば彼はジブリを好んで見ていた人間だったと思い出す。何の映画が好きだと言っていたのだったか。
「トトロか」
「そう、もしくは千と千尋かも。トンネルの向こうは不思議な世界！」
「ああ、そうだったな」
「え？」
　蒼は不思議そうにこちらを振り返って首を傾げた。しかし、冬真の顔を見るなり何かを悟ったような表情で頷くと駆け足でトンネルの向こうへ消えていく。トンネルの中と外のコントラストで彼の姿が光に溶けてしまって、言いようのない焦燥感に襲われて冬真も駆け出した。
　トンネルの向こうは不思議な世界ではなく、高台の道路と右には海、左は崖のような急斜面になっていた。この上が高台になっていて、目指す灯台はそこにある。
　少し息が上がってきたころ、ようやく目的地が見えてきた。高台の一番上、この町の全体を見下ろせる場所だ。ふと、笑い声が耳に入って目を向ける。そこは色鮮やかな花

に囲まれた、小規模な墓だった。そこの前で中年の男性が五人ほど円になって座り、歓談している。死人を囲んでいるにも関わらず、そこは活気づいていて、生き生きとしていた。隣の蒼が、お花見も悪くないね、と呟いた。冬真はそれが何を指しているかよくわからなかったが、とりあえず頷いておいた。

灯台は、随分年季が入っていて、黒く錆び付いていた。正面の扉は閉ざされており、内部に入ることは出来ない。周りは落下防止の柵で囲まれていた。しかしその柵も下腹部までの高さしかなく、少し身を乗り出すと転げ落ちてしまいそうだ。

「せっかくだから、写真撮ってあげようか」

そう言って蒼がスマホを構える。シンプルな黒のケースがきらりと反射した。

「撮ってどうするんだ」

「うーん、思い出？」

「観光スポットじゃねえんだから」

少しの間をおいて、そっかあ、と言って彼は引き下がった。何か言葉を飲み込んだことは明白だったが、冬真は特に言及しなかった。そのまま柵の向こうに目をやった。目の前に海が広がっていた。少し視線を右にずらせば、町が一望できる。高いビルなどが全くなく、随分遠くまで見通せた。土と靴底が擦れる音がして隣を見れば蒼が並んでいた。冬真は、自分がこの場所に立ってもなんとも思わないのにも関わらず、蒼がそこにいるという事実に少し肝が冷えた。線の細い彼は、風でも吹いたら落ちてしまいそうな気がしたのだ。そんな考えを誤魔化したくて、冬真は口を開いた。

「本当、びっくりするほど田舎だな」

「やっぱり、珍しい？」

「そりゃ、まあ。本当に現代か疑わしい位だ」

「そんなに！」

それを聞いて蒼は大袈裟に驚く。その姿が、記憶の中のやや幼さのある彼と重なる。あの時は当たり前だった日々が、急に眩しく思えた。

変わってしまった。時間は進んでしまった。冬真はそんなことを今さら感じた。

折角だからお土産を買っていくといい、珍しいものが見れるから電車に乗っていこうと彼が言うので、車で最寄りの駅まで向かった。二十分かかった。田舎の洗礼を浴び、冬真は自分がそれなりに発達した都市に住んでいることを改めて思い知った。少し前、田舎暮らしがブームになったが、そのときにイメージされる田舎はこういうところではないだろう、と思う。電車が最低でも二十分に一本くらいはあって、バスも通っていて、最寄り駅まで歩いて行けるくらいの発達をしているところで、疑似的に自然に囲まれて満足したいだけなのだろう。少なくとも冬真はこんなところには住めないことを既に痛感していた。

到着した場所には、小屋のような鈍い銀色の建物があった。入口と出口がゲートのようにくり抜かれており、向こう側にホームが見える。自動改札の類はない。ぽっかり空いた目の前の四角の右隣にオレンジの JR マークと、白いゴシックの駅名が続いていた。それだけである。

「これ、駅で良いんだよな？」

冬真の問いかけに、蒼が頷く。彼が先導し、冬真は恐る恐る中に入る。入ってすぐ右手に、透明な扉で仕切られた待合室が見えた。青い無機質な椅子たちのなか部屋の右上端にぽつりと佇む赤い金魚の張り子がやけに存在感を放っていた。左手には自動券売機があった。古い定食屋とかに行くと時々見る、ボタンを押して券を買う機械だ。それだけでも冬真にとっては十分な驚きだったが、そこにはこう記されていた。
『故障中！ きっぷは窓口にてお求めください』
「嘘だろ……」
冬真はそう呟いて絶句した。その声に応えるように窓口の奥から初老の男性が出てきて目が合う。窓口の前に立つと、「どこまでですか？」と聞いてくるので、事前に決めていた目的地を告げた。大きな道の駅があってお土産が買えるところだ。
駅員の男性はぱちぱちとレジを打ち、金額を提示してくる。お金を払うときっぷが渡される。そのきっぷは特急券の大きさで、そこに駅員が手でスタンプを押して渡してきたものだから、冬真はもう何も言えなくなってしまった。
ホームに向かう階段を上りながら、冬真はしみじみとこぼした。
「きっぷを買うのは初めてだけど、これが違うのは分かる。普通もっと小さいよな？」
「改札に通すことを最初から考えてないんだろうね」
降り立ったホームもまた、錆びれていた。飛び降り防止の柵がなく、コンクリートの灰色が剥き出しになっていた。ところどころ切れ目から雑草が顔を出している。次の電車を案内する電光掲示板は無く、代わりに見覚えの無い機械が取り付けられていた。三両の電車のイラストが上半分に、その下に左右を指す矢印がある。おそらくそこが光るのであろうことは見て容易に想像がついたが、冬真にはそれが何だか全く分からなかった。辺りを見回せば線路のない方はぼうぼうに伸びきった草に囲まれている。見たことのない光景に戸惑いながらも電車を待っていると、突然上方からけたたましく、カンカンカンとサイレンが降ってきた。見上げれば、電車のイラストと左を指す矢印が赤く点滅している。さらに一拍遅れて、真後ろでひどく音割れした声が「電車がまいります。ホームの内側に下がってお待ちください。電車がまいります……」と繰り返した。見れば、錆び付きすぎていて気が付かなかったが、スピーカーが取り付けられていた。まるで壊れたおもちゃのように「電車がまいります……」と繰り返す。カンカンカンとサイレンが降り注ぐ。閑静な田舎の町に佇む駅舎は一瞬のうちに爆音に包まれる。しかし電車は来ない。冬真は暫く呆気にとられていたが、段々おかしくなってきて笑いが込み上げてきた。
「何なんだ、この状況、というか、あれ、まだ動いてるのか。このスピーカーなんか、音割れしすぎてよく聞き取れないな！」
突然スピーカーに負けず劣らずの大声を出して笑いだした冬真を、蒼はぎょっとした目で見つめた。
「一体いつの時代だ、ここは！」
しかしその台詞につられて、蒼も笑いだす。これはさすがに僕でもひどいと思うよ、なんて。爆音の中、二人の笑い声はかき消されて聞こえない。それでも向かい合って笑い続けた。ゴーっと金属の摩擦する音とともに近づいてきた電車は、耳障りな甲高い金属音と共に停止する。ところどころ剝がれた赤、くすんでクリーム色になった白。しかも、一両。湧き出る笑いを抑えながら、二人は電車に乗り込む。

電車の中は予想通りがらんどうで、殆ど貸し切りに近い状態だった。窓から外の景色がよく見えた。全体的に平らで、海か畑、といった感じだ。海沿いを走るのはなかなかロマンチックだが、日本海があまり綺麗でないのは本当らしいと冬真はぼんやりと思う。それでも、海の上をそのまま滑っているような感覚はなかなか体験できるものでない。各駅に止まっても人は下りず乗らず、空っぽの箱は進む。途中、やけに人の多い海岸を見た。

「あそこ、海水浴場か」

「そうだよ。こんなに風の強い日にも人がいるんだね」

「まあ、観光するときに天気なんか関係ないだろ」

俺だって、どんな土砂降り雨でもきっとここに来ただろう、とは何故か言えなかった。冬真には、もしもの話をするのがひどく怖く感じた。

「そうだね。僕たちも後で海岸まで行ってみる？　ここじゃなくて、家の近くの。小さいころ、おばあちゃんたちと一緒に釣りをしたことがあるんだ」

だから、蒼がこう切り出した時、冬真は心臓の部分を強くつかまれたように緊張した。続く言葉は全く別の物なのに、一瞬、心の中を読まれているのかもしれないと本気で考えた。それは自分にとって何よりも恐れるべきことだと直感的に感じてしまった。冬真は努めていつも通りに「そうだな」と返した。苦しむ心臓を落ち着かせながら。ほとんど逃げるように視線を窓の外に向けると、目的の駅は次のようだった。救われた、と思った。

＊

手にお土産袋を二つほど下げて初めの駅に戻ってきたころには、もうすっかり夕方だった。鬱陶しいほどの日の光は随分落ち着いたものの、じっとりとした暑さは消えない。潮風も相まって、汗がじっとりと張り付くような不快感を覚えた。車の冷房を最大にすると、一瞬ぬるい空気が排出され、徐々に車内が冷えていく。送風口の向きを調整する蒼を横目に、冬真は問うた。

「今日中に海まで見ておくか？」

「それがいいと思う。もう明日には帰らなきゃいけないからね」

冬真はそれに生返事で返し、車は家に向けて走る。そこの駐車場に停めるころには空は濃いオレンジ色に染まり始めていた。

家から五分も歩かないうちに、海につく。ろくな護岸工事もされておらず、堤防もない海だ。海沿いはそれなりの工業地帯で、石油であろうか、大きなタンクが見える。もしものことがあったら助からないだろう、と冬真は考えた。

海岸にはたくさんの漁船が繋がれており、強風のせいであちこちに揺られていた。水面にはよくわからない海藻が打ち上げられていて、とても綺麗なものではなかった。海水浴場というのは只の海ではなく、何らかの方法でちゃんと整備されているのだとあまり関係のない気付きを得た。

「なんだか、夕日と海なんて青春みたいだね」

そらした視線の先で、蒼が目を細めてそう言葉を零した。深い茶色の瞳に夕焼けの光

が反射してとても綺麗だった。
「青春みたい、っていうか俺たちはまだ青春を謳歌していていいだろ」
「そうかなあ。大学生ってあんまり学生って感じがしないんだよ。高校生の時にいろんなものを置いてきちゃった気がするんだ。キラキラしたものを、全部」
　冬真は、それが正しいとか正しくないとかではなく、蒼の口からは聞きたくない言葉だと思った。例え彼が変わってしまっていたとしても、それを突き付けられたくはなかった。
「あ、行き止まりだ」
　少し先行する蒼がそう言って立ち止まったので、危うく衝突するところだった。海の上に作られた細い足場は、中間ほどで行き止まりになっていた。さらに奥にもう一つ看板が見えることから、昔はあの場所まで行けたのだろう。ただ転落か何かあったのか、奥まで進めないようになってしまっている。
　残念、戻ろうか、と踵を返す蒼の腕を冬真は引っ掴んで、無理やりそこに座らせる。足が海の上で宙ぶらりんになった。白波が足元に打ち付けて、少し恐ろしい。
「いい加減教えてくれてもいいだろう、お前、こんなところで何をしてるんだ。俺を連れてきて何をしたかったんだ」
　蒼はその言葉をしばらく咀嚼した後、少し目を泳がせた。何かを言おうとして、口を閉ざす。それから観念したようにかぶりを振った。
「さすがに明日帰っちゃうしね。付き合わせちゃったし、教えようか。大したことじゃないけどね」
　蒼は視線を夕暮れ空の向こうに向けた。
「本当に大したことないんだよ。あの家、僕のおばあちゃんとおじさんおばさん夫婦が住んでいたんだ。で、一年前位に夫婦にお子さんが生まれたみたい。他人事みたいな言い方してるけど、一応その子とはいとこの関係なんだよ。それから、今から一か月くらい前におばあちゃんが死んじゃった。結果、一家揃って東京に引っ越すことにしたんだって」
「よくわからないな。何で東京なんだ？」
「おじさんの仕事の関係らしいよ。IT 関係の仕事みたいで、個人事業主の扱いではあるんだけど都会にいた方が何かと便利みたい。あと子育てするにもこの環境じゃ大変だから、物心つく前に引っ越しちゃうんだってさ。もうこの家にいる理由もないから」
　冬真はこれまで見てきた町の風景と、今聞いた単語のミスマッチに思わず笑ってしまいそうになった。有望な若者がいなくなっていく、田舎の典型だった。そんな冬真も道中ここに住めないことを悟っているので、無理もないことだと思った。
「それでもう、皆行っちゃった。タイミングが合わなくて、その子には一回も会えなかったなあ。それでも僕、帰省ってことで結構あの家に来ていたから、思い入れが無いわけじゃないんだよ。おばあちゃんのことも大好きだったから。連絡を入れなかったのは急に決行したことだったのと、単純にあんまり説明したくなかったから。それだけだよ」
　それだけ、と言いつつ蒼は続ける。
「おばあちゃんが亡くなった後、お葬式、あげなかったみたい。本人の希望だから仕方ないなんて言ってたけれど、僕はそれにカチンときちゃったの。だからあの人たちがいなくなった家で最後のお別れでもさせてくれって。ガスも電気も水も止めるのはもうちょっ

と待ってくれって言って、追い出すみたいにあの家を占拠したんだ。お母さんの代わりに、僕が来なくちゃいけなかったの。あの家に」
　この町に、と蒼は呟き、視線を冬真の方に向けて、にこりと笑った。
「まだ納得いかない顔してるね。何が気になるの」
　自分がそんな表情をしている自覚がなかったので、冬真は少し考え込んだ。蒼が話したことをその通りに受け取ればそれまでだし、嘘をついているにしては細かい。彼が、今は亡き母親を愛していたことも知っている。それに、道中祖母の話をしていたことから考えて、多分本当なのだろうと思う。
　しかし、不可解なことがあった。
「だったらお前、なんで俺からの連絡にすぐ返したんだ。まるで見透かしたみたいに」
　まるで待っていたみたいに。冬真はその言葉まではどうしても続けることが出来なかった。この状況下で蒼が冬真を待っている理由を、一つしか思い浮かべられなかったのだ。
「冬真くんはなんでだと思う？」
　一番恐れていた質問を突き付けられ、固まる。しかし、今は変に誤魔化す場面ではないと冬真は腹を括った。
「俺はてっきり、お前がいなくなっちまうんじゃないかって。それで、何の迷いか、最後に俺を呼び出したのかと」
　それを聞いた蒼は、目を丸くした。もう太陽も地平線ぎりぎりまで落ちていて、橙を通り越して赤い夕陽と紫の空がグラデーションになっているため、彼の顔が見えにくくなっている。発された声は、震えていた。
「冬真くん、すごいこと言ってるけど、分かってる？」
　冬真は彼のその様子に面食らって、一瞬反応が遅れた。下手なことを言ってしまったかもしれないと反省もした。
「いや、そりゃお前が死ぬわけないし、面と向かってそんなこと言うのもどうかと思うけど、俺は嘘が苦手だから」
「そっちじゃないけど、まあいいや。あながち間違ってもいないし」
「えっ」
「いなくならない。ならないから」
　それを聞いて冬真は大きく安堵の息をついた。蒼はそれをどこか冷めた目で見た。
「まあ、なんていうか、会えて良かったよ。なんかいろいろどうでも良くなっちゃった」
　その表情も声色も、ここ二日間で聞いたものの中で一番力が抜けていた。冬真もよくわからなくなってしまったが、彼の様子を見るに無駄なことではなかったのだろうと思えた。昔からずっとそうだった。深く踏み込んでこないし、踏み込まない。だからきっと、冬真も蒼も互いのことを良く知らない。少なくとも冬真にとっては、その距離感が心地よかった。

＊

冬真は、そこまで思い返してハッと顔を上げた。そして、手元の小さな切符を強く握りしめていたことに気付く。今日は用事があって出かけることになっていたため、駅までやってきた。普段はICカードを携帯しているが、今日はほんの出来心で切符を買った。定食屋にあるような券売機ではなく、ましてや窓口でもない、ごく一般的な黒と緑の機械からだった。中心の駅ではないものの、それなりの規模の大きな駅なので、会社員や学生たちが次々と自動改札にカードやスマホをかざして通っていく。冬真も流れに乗って、小さな切符を改札に通した。少しだけ笑ってしまった。

あの田舎から冬真が帰った次の日に、蒼が帰ってきたと最初の彼から連絡を受けた。『迷惑かけたな』という一言を見て、本当に、と返したかったがやめた。冬真は蒼にしか迷惑をかけられていないし、そもそも彼から連絡が来なければ蒼がいなくなったことにも気付けなかっただろう。それにあの不思議な時間は、なんだかんだ楽しかった。もう二度とあの町に行くことは無いだろうが、機会を見て今度は自分から旅行に誘ってもいいかもしれないと冬真は考えて、また少し楽しくなった。気付けば階段を降り切っていたので、止まっていた電車に乗る。それと同時に愉快な発車メロディーが流れ出して、ドアが閉まる。危なかったと胸を撫で下ろす。

電子音声が行き先を告げる。それを聞き、冬真は首を傾げた。何だか、聞き覚えのない駅名ばかりだ。ばっと顔を上げれば、向かいのホームに止まっている電車もちょうど発車した所だった。その頭のモニターを見てやっと気づく。間違えた！

思い出に浸っていたからだろうか、電車に乗るのが久しぶりだからだろうか。あれこれ考えるが、発車してしまった今何をしようともう遅い。それぞれの電車は互いに速度を増して、すれ違うように遠ざかっていく。

冬真はそれを見届けて、まあいいか、と思い直す。ここは電車が一両で走るような田舎ではないので、適当な駅で降りてすぐに引き返すことが出来る。時間が厳密に決まった予定でもないから、焦ることもない。電車なら、いつでもやり直しがきく。元々乗る予定のものに追いつくことは出来ないが、それは仕方ないことだろう。

窓の外を見れば、高層ビルや大型商用施設がひしめく都会めいた景色が流れていく。無駄になってしまう切符のお金が少し勿体ないけれど、それも悪くないと思えた。

仙郷淹遁記 /鵜飼峰々子

仙郷淹遁記 /鵜飼峰々子

仙郷淹遁記（せんきょうえんとんき）

1

一晩きりの、しかし長い雨だった。夜が明けると、東の空から荒れた世界が明らかになった。谷底の村に夜通し降り続いた雨は橋の元に泥を寄せ、灰色の水面は今やおとなしくなっていた。切り立つ岩の間から、薄桃色の雲が見えた。村の住民はまもなく目を覚まし、炊事の仕度や動物の世話を始めるだろう。

この国の土地は時折氾濫を起こし、人々の家や家畜や財産をすっかり流してしまう。遠い土地の人々は雨の恵みの富を貯え、あるいは激しい干ばつの果てに死に、そのようなことを歴史の限り続けていた。しかし、ある川の源、谷の底に居を構える、風雨の訪れないこの村の住人にとって、他国の憂いなど知る由もなかった。

珍しい雨から逃れるように、厩（うまや）の中で眠っていた犬たちは夜が明けるとさっそく外を探検し、慣れ親しんだにおいのなにひとつないこと、ふだんの遊び場が一つ残らず水浸しなことを理解し、辺りを駆けて喜んだ。青草と泥の臭いだ。ふと、その一匹の鼻を何か生臭いにおいがついた。真っ黒な立て耳の犬は川辺を滑るように下流まで降りていき、木橋を三つ通り過ぎ、男を見つけた。

男は土手に崩れかかるような姿勢で固く目を閉じ、肩を揺らしながら呼吸していた。着物の一式は足元を始点に衫（はだぎ）まで粘りつく血で汚れ、右手には刃こぼれだらけの刀が握られていた。浅い川辺の泥だまりは薄い赤に濡れていた。

黒い犬は、それが自分の食事と、人間と、双方に似た臭いであることに気づいて、当惑した。まもなくやってきた手下たちは、見たことのない着物の男を見て、しきりに吠えたてた。しばらくすると鶏がうるさく騒ぎ出し、空では鵯（ひよどり）がわめきだした。

丘の向こうから老爺が顔を出した。手下たちは喜んで彼に駆け寄り、老爺は男の元へ落ちるように近寄った。足元に残飯の椀が落ち、足に中身が引っかかった。

老爺は男をゆすぶり、男の頬を手のひらで叩き、その口元に頬を寄せた。黒い犬は男の顔を舐めた。まだ薄っすらと息をしていた。

「誰かァ――誰かおらんかねェ――」

まもなく、岡の向こうから老婆が、娘が顔を出した。皆、着物や濡れた手をそのままに、老爺の元へと駆け寄った。

老人の腕が四方から伸びてきて、男の腕や脚を取って引き上げるのを手伝った。男たちはその胴を持ち上げ、刀を取り上げた。子どもたちは丘の向こうから、頭を乗り出して見ていた。

男は老爺の家に運ばれた。そこには馬の使う大きな水樽があったし、粥を作る穀物も、乳を出す元気な牝牛もあって、煌々とした火のそばで、男の体ばかりが冷たかった。老婆たちは綺麗な布に湯を含ませ、男の顔を拭いた。土と血が幾重にもこびりついていた。あるいはその足を拭いた。五本の指の間には、小石交じりの土砂が詰まって、指を傷つけていた。

ある母親は一つの家に怯える子供たちを集めて食事を食べさせた。鶏小屋の前に立ちすくむ娘は人々の波間で男の赤い衣が開かれて、いっとう赤い傷口が腿に広がるのを見た。老婆が彼女の肩を抱き、彼女を遠くへ押しやった。

男は手当を受けた後、二日の間眠り続けた。腿(もも)の矢じりは除かれ、血は止まったが、今度は高熱が始まった。住民は交代で彼の元を訪れ、牛の乳で濡らした布を口に含ませたり、体を拭いてやったりした。子どもたちは彼のそばで適当な名前を呼んだり、花や小石を土産に置いていったりした。

男は悪い夢に魘されているようで、その顔は急激に青ざめたり、やはり急激に血が上ったりした。老爺はその強張った手で、男の肉刺(まめ)のできた手を握ってやった。その夢は夜更けに始まる時も、夜明けに始まることもあった。

昼間には男の顔がはっきりと分かった。男は齢十八になろうほどか。日に焼けた顔の眉の剃り跡の青、墨で引いたような眦は南方のものらしく、しかし痩せてくぼんだ目のあたり、引き結ばれた唇の末がきつく下がっている様子は、腹を空かした狼のようだった。見る者の肌を刺すかのようなその飢えをどこかで悟った子供たちの中には、彼に触れること、彼が起き上がることを怖がる者もいた。

3

男は三日目の朝に目を覚ました。老婆は側で朝食の粥を作り、固く塩した菜を分けていた。老爺は鶏に餌をやって間もなくで、空になった穀物の椀を持っていた。

老爺は男が起き上がり、背を丸めたまま老婆の背中を眺めている、その背中を見た。その体からは布団が滑り落ちていった。男はこちらを振り返り、口を開いたが、喉からは錆びた音しか出なかった。

「今、水をお持ちしましょう」

老婆は驚いたが、すぐに椀を取り出して青年の分を作った。老爺は水瓶から茶碗一杯の水を取った。男は拝むようにそれを受け取ると、「ありがとう」と何度も繰り返した。男は泣いていた。

2

男ははるか南方の国の、小さな村の出身だった。彼は若いころに父を亡くし、ひとり残された老母を養うため、鍬や鋤を取って一生懸命に働いていた。しかしある日、北部の異民族討伐の命が国に敷かれ、彼は役人に取り立てられ、まもなく兵として働くことになった。彼は母に生還を約束し、はるか北へと旅立った。

北の地での戦いは長く続いていた。異民族は忌まわしい狼のように、騎馬の大きな群れを作って移動していた。彼らの馬は寒さも知らず、苦しい冬でも白い湯気をまとって何里でも走った。此方が仕掛ければはるかに逃げ、強弓を引き絞ってこちらを射た。此方が逃げればどこまでも、恨みを忘れぬように追いかけて、止まった瞬間に食いかかってくる。

彼らを討とうと膨大な量の穀物や馬や富が国中から費やされ、名だたる賢将、猛将がそれを率いたが、彼らの群れのほんの表層を削り取っただけで、その殿を討つには遠く及ばなかった。

男は歩兵として懸命に戦った。彼には同じく帰郷を夢見る友人ができたが、一人また一人と射殺され、斬り殺されていった。何よりも、北の地に厚く垂れこめる鋭い寒さが、少しずつ針を潜り込ませるように彼の心を蝕み、凍傷を負いかけさせた。

彼は漠然と戦場で死ぬであろうと予感していたし、実際に彼は戦の最中に脚に矢を受けた。騎馬が駆け回る中、彼は今にも倒れ込んで、目を瞑ってしまいたく思ったが、ふと、ちかちかと七色に光る瞼の裏に老母の顔が浮かんだ。彼の肺は故郷の温かい風を思い出し、指は果物を剥く柔らかい感触を思い出し、死ぬのが惜しくなった。彼は這いずり回るように戦線から逃げ出して、森のほうへ、川を遡って走った。異民族は残党を捕虜として捕えもしたが、なによりそのまま射殺すことが多かったから、どうしても遠くへいかねばならなかった。男は長い間無我夢中に走ったが、自分がどの道を経て、どこへ向かって走っているのかとんと見当がつかなかった。山の岩辺で脚を滑らせた先、浅い小川が走っていて、ようやく自分が戦線を遠く離れたことを知った。彼の熱い体の中を音を立てて血が走り、酷い空腹を覚えた。彼は水をひと掬い飲み、幽鬼のように体を揺らしながら、どことも知れぬ川の上流に向かって歩き出した。やがて疲れて、倒れてしまうまで。

男は一日ほど老夫婦の家で休んだ。彼の若い体はすぐに生きる方法を思い出して、まもなく辺りを歩いたり、家畜の世話をしたりできるようになった。老爺と老婆は、自分たちの持てなかった子供が出来たようで、それが夢見る心地のように嬉しく、男のために鳥を弑(しい)してスープにしてやり、上等の服を与えた。

といっても、奇妙なことに、その村で手に入る洋服、果ては言葉に至るまで、男が村や戦場の仲間と使っているものに比べて幾分——数百年近く——古びていた。住民からしてみれば、男の剣や頭髪が、この村とは大いに違う——まるで数百年後のような——ものだったので、奇妙でたまらなかった。男は外から迷い込んだ旅人、あるいは神仏のもたらした何かなのだろう、と住民たちは検討をつけた。子どもたちは彼を追い回して、

彼の住んだ土地や食べ物について激しく質問したが、両者の間に伝わらない言葉があり、まったく未知なる概念があった。

何よりも、住人たちは余人の悪意というものをまるで知らないようだった。

3

男は老夫婦の畑をよく手伝い、時には他の家の手伝いに出向いた。村にはそもそも若者はめっぽう少なかった。ある日彼は、桑の木の向こうにある小さな家の蚕棚を直すように依頼されたので、道具を揃えてそこへ向かった。

桑の木の家の中では娘が機を織り、その母が蚕に桑の葉を与えていた。この村で彼に年の近い女は、この娘だった。

蚕棚の修理はあっという間に終わったが、二人はだらだらととりとめのない話——牛の様子、最近の天気、木の様子など——ばかり話した。その退屈さを心中何処かで嘲笑いながらも、しかし二人はそれを楽しんだ。

娘の顔は、都の娘たちに比べればずっと凡庸だった。細い伏目のわりに口は大きく、笑う顔ばかりが目についた。ただこの谷の中だけで育ったかの女は、柔らかで、血の薔薇色を透かした四肢と頬をしていた。この一帯のものはみな適当な穀物と肉を食い、適当に太っていた。暖かな気候は彼らの心を柔和にした。

その後も彼らは誰に引き合わされるわけでもなく、二人で過ごすようになった。娘は最も美しい女ではないし、男は最も美しい男ではなかったが、二人で他愛ないことを話し合う時間は、二人の精神に若芽の和毛(にこげ)に触れるような快感を与えた。自分がまだ若いという、今すぐにでも失うであろう美徳を溶かす、夢に似た快感だった。

そして、彼は蚕棚の礼という名目で、正式に桑の木の家の食卓に招かれた。彼は別の住人から報酬に貰った杏を籠に入れ、その家を訪ねた。

村の中でも鄙(ひな)びた所にあるその家は、単なる蚕小屋だったものを人のために作り替えたもので、中は狭かった。小さな窓からは娘と母が肩を寄せ合い、暗い台所の光に布を透かすのが見えた。入り口の右手すぐの炊事場には、鍋や壺がいくつも置かれていて、清潔に洗い清めてあったが、しかしどこか年経たものの煙臭さが染みついていた。

娘に続き、母親が手を拭きながらやってきて、彼に茶を供した。葉の大きさがまばらで、色味も合わないそれは粗悪ながらに正式の茶で、それは村人が手ずからに作ったものだった。

しばらくすると食卓に料理が並んだ。肉は少なく、穀の色は濁るなど質素であったが、三人は楽しんで食事を終えた。

娘の今にも埋もれそうな凡庸さに対して、その母の美しさは目を引くものがあった。彼女は未亡人らしく、息を飲み込んだり、目をそらしたり、鬱屈した色を滲ませた所作をした。この村の住民に似合わず、痩せて所々に骨の栓を浮かすような彼女の、真っすぐに通った鼻梁や、細く長く節だった指は、その所作によく似合った。ただ窓辺に座っているだけで、一種形容しがたい何者かの威容を纏っているようで、それは亡父の面影であるように思えた。その夫が死んだのはもう十数年前のことである、と娘は男に伝え

ていた。

娘は手を引いて、家の中を案内した。ささやかな庭には合歓(ねむ)の木があり、木の上では猫がこちらを眺めていた。男はどうしても、東向きの部屋、蚕の部屋が気になって仕方なかった。仕切りの向こうでは、何かかりかりと小さな音が鳴っていて、それはちょうど蚕が桑の葉を食ている音だった。薄く広い箱の中に麻の網が敷いてあって、一面に蚕が寝そべっている光景を思い出した。未亡人の指先が固いのは、繭を煮る鍋を、一晩中木べらでかき回すためだった。

娘はそちらばかりをぼんやり見まわす彼がじれったくなって、男の手を引いて西向きの部屋に連れて行った。その向こうには背の高い機(はた)が合って、何にも染められない、真っ白な絹織物が、差し込む光で水面(みなも)のように光っていた。

娘の作る織物はこの村でも群を抜いて素晴らしかった。母の相伝だというその絹織物は、指先で細かく糸の粗密を織り込まれて、雲、花、流れる水の模様が透き通るように浮かび上がっていた。娘は男の手を取って、指先を絹に触れさせた。それは女の肌のように柔らかく、男の手のひらを冷たい汗が伝った。

男がそれを知る機会は結局訪れなかったが、決して器用とはいえない娘が若くして上等の絹織物を織れるようになったのは、その母が厳しく、時にしなる木の棒で打擲しながら躾けた結果のことだった。彼女はまだ十ほどのころから機を与えられ、足も手も届かないような状態で朝から晩、時に夜中に火を立ててでも機を織った。確かに母の織物を綺麗だと思ったし、それを織りたいとも言ったが、どれだけ丁寧に織ろうとも母はそのほつれや歪みを見つけ、糸を解き、時に引き裂いた。何度説明しても、娘は上手に織れなかった。どうしてお前は、とその母は言った。彼女は十ほどの時分から上手に機を織っていたと、それは誰かに叱咤されずとも、自分から始め、家人に止められるまで織り続けたと、そう言った。娘は毎日のように泣いて、のんきに遊ぶ他の娘たちを恨み、母を恨んだが、その家を出たとして行くところもない。外から落ち延びてきた彼女らには、親切な隣人がいるとはいえ、頼れるような家が何一つなかった。

娘はその母が食事の支度をしたり、外へ出かけている間、蚕たちの部屋に籠り、桑の葉が食まれる無数の音を聞きながら、ずっと俯いていた。白い蚕の成虫は、くるくると蚕棚の上を動き回って、絹の着物に包まれたお姫様のようなのに、雌と雄を引き合わせると、その尻を突き合わせて交接した。肥って、皮膚の弛んだ方が雌で、細い方が雄だった。その母はいつも二匹をもぎ取って、延々と続く交尾を終わらせていた。というのも、蚕蛾は引き離されない限りいつまでも、死ぬまで交尾を続けるのだ。

4

彼のように若い、その上勤勉な男は久方ぶりだった。住民たちは彼の修繕した柵や、彼が躾けた馬の出来に大層喜び——実際、その出来は至って平凡なものだったが——老人たちは彼に十分すぎるほどの贈り物をした。この村には糊口をしのぐに余りある、素朴な富があった。男は薄汚い麻布や、酸っぱい杏の実であっても喜んで受け取り、身に余る

それを時には床に臥せった病気のものに、時には腹を空かせた子供たちに分けてやった。
村には壮年の男もあり、彼は罠の作り方や動物の絞め方をよく心得ていた。村の男たちは代々それを学んできたそれを、男は一緒に学び、一通りの内容を会得した。

その間、男はたびたび娘の姿を見た。時に、娘はほかの娘たちと額を寄せ合って、着物に刺繍をしていた。赤い糸で服に施すそれは、各員に技術や得意とする図柄があり、丁寧な刺繍を贈りあったり、こっそり揃いにしたりするのだった。男はそういった集まりを見つけると、手を振った。女たちは一瞬、男の姿を見つけるとシンと静まり、次の瞬間にはどっと歓声を上げた。彼女の肩を小突いたり、羨望の声を上げたりした。男には男の、女には女の社会があり、なんとなくお互いを侵犯することなく暮らしていたから、男がその会話の子細を知る機会はなかったが、なんとなく晴れがましい気持ちがした。

男はある日、馬を馴らす傍らにその村の中を探検してみることにした。その村の中はのどかで、梅の木や桑の木、大きな田畑、牛馬の小屋などが並んでいて、その果てには切り立った、灰色の崖があった。この村はぐるりと崖に囲まれ、土地全体が落ちくぼむような形をしていて、住民たちはその中で暮らしているのだった。
住民がその内外を行き来している様子はなかったし、また子供たちもその外に興味を持つ様子はなかった。外の世界があるということを知らないまま育ったので、理解できないらしかった。土地に大きな台風や飢餓が訪れることもなく、住民は長らくの間、風雨のもたらすささやかな瑕疵をゆっくりと修繕しながら暮らしている、と老婆老爺は彼に言った。
目下、住民たちが静かに恐れていることは、親切な青年である彼が、この村を出ていこうとすることだった。今や老人たちは愛しい彼を失うことを恐れていたし、彼に贈り物をするのもその表れだった。
男はそれを肌のどこかで感じていたし、その恩に報いたいとも思っていた。しかし時折、老母が現れ、枕に顔を埋めて泣く様子を夢に見た。彼女は懐かしい家の中でいっそう年を重ね、仕事に疲れた体は夜毎に深く倒れ込むようだった。男が帰り、そして婚姻を結ぶ日に備えて、彼女は懸命に貯蓄をしていたが、身を絞るような重税で彼女は痩せこけてしまった。男は、それを親切な老爺に打ち明けたならきっと帰るように勧めるだろうことを知っていた。けれど一方で、果たして自分がこの楽園を離れ、俗世の税や戦争の苦痛に耐え得るのだろうか。とも思った。凍傷の始まりの、指先の間隔がゆっくり薄れていく感覚を思い出した。

男は娘と会った時分、その夢を打ち明けた。それは晴れた日の穏やかな午後のことで、牛は草を食み、犬と子供は野原を駆けまわっていた。二人は川辺に腰かけ、眩しい日の光に目を細めていた。
女はひざ掛けにしていた綿の布を弄びながら、彼を見た。彼女は何かを強いるという

ことが今までなく、またそれが彼女の最大の美徳であった。彼は彼女を、自らの故郷に連れ出したいと言った。彼女は共に彼の故郷へ向かうと約束した。

男が行った後、彼女は自分の今までの人生を思い返した。自分の指先が擦れて固くなっているのも、指の間に肉棘(まめ)があるのも、全て蚕の家の娘に生まれた自分の運命だった。この村で暮らし続ける限り纏いつくその運命は、彼女自身の体から今剥がれ落ちようとしていた。しかし、その後どうなるだろう。この村を一歩出て、南の故郷に辿り着くまでどのような運命があるだろう。彼女はその場に立ち上がったが、どこへ行こうとも思えず、自分の影が傾くのを見ていた。

5

翌日、男は顔と手を冷たい水で洗い、一番美しい服を着て娘の母に会いに行った。彼女はやはり貧しいながらに礼節を以て彼を迎え、冷やした林檎と茶を供した。

男は故郷の事、夢の事、娘の意志について話し、彼女は静かにそれを聞いた。彼は喋るにつき、自分が石の壁に話しかけているように、途方もなく響き渡る寂しさに駆られたが、しかしそれを形容する言葉を持たなかった。

話が終わると、その母は彼に、いかに己ら母子がこの村に逃れたかを話した。

彼女らは元来北の国のある村で、麦を作って暮らす平凡な農民だった。しかし、十年に一度の激しい飢えが彼らの村を襲い、いつになく激しいそれにあっという間に蓄えは尽きてしまった。

ある日、その夫は妻に、子供を殺してしまおうと勧めた。彼女にとって切り離された肉体の一部を、切り刻もうとした。夫は三夜、寝台の彼女の隣に腰かけて、時に彼女を揺さぶるように、時に彼女の肩にあたたかい息を埋めるように、説き伏せようとした。

彼女はある夜中、娘を固く抱きしめ、家を逃げ出した。枯れ木の道を抜け、森に入り、足を傷つけながら走り続けた。行くとも帰るとも知れないその道中、自分の知らない川が一筋流れていた。彼女はそれを飲み目の前が眩しくなるのを感じた。その川は彼女の足元から山の肌に沿って長く続いていた。彼女は縋るように、その源に向かって、幾日も歩き続けた。そして、ここに辿り着いた。

未亡人は彼を愛していたし、彼も未亡人を愛していた。また、互いに娘を心の底から愛していた。

未亡人は男と約束した。いかなる方法であっても、彼女を痛めつけてはならない。彼女はその他に何も求めなかったし、男は誓いを立てた。

6

二人の出立はまもなく行われた。それはある寒い夜明け前のことで、彼らには健康で若い馬が一頭、一握りの米と麦、強弓、干し肉、絹織物、そして未亡人が手ずから織った美しい布が与えられ、馬の背はまもなくいっぱいになった。

老爺がその案内をすることになった。子供たちや、その他の若い住民にこの村の出口を教えるわけにはいかないので、出口の存在は一部の長老格の者しか知らないのだった。

彼らは冷たい、青い光の中を北に向かった。男の眼は布で覆われ、娘がその手と、馬の手綱を引いた。老爺と老婆、そして未亡人が彼らを見送った。男の時間は婚姻の儀を行う余裕すらないほど、切り詰められていた。

男は、自分が暗い場所を進んでいると分かったが、それがどこであるかは分からなかった。足元には不思議と、大きな石や彼の脚を傷つける鋭い岩がないのだった。やがて、彼の腕に金色の光が触れた。いつしか彼は、楽園から脱していた。

目隠しを取ると、娘は俯いていた。姉や妹と慕った少女たちの名前を思い出して、赤い刺繍が施された服の裾を握りしめていた。彼女が遅かれ早かれ嫁ぐ身であることを、少女たちの誰もが予感して、しかし口にしなかった。ただその刺繍には、邪気を遠ざける鈴や、世界の始まりの、大いなる母の残した卵の絵が縫い込まれてあった。

彼らは布を売り、当面の金と食物を手に入れた。そのまま南方まで真っすぐに向かおうとしたが、戦火は以前、その北の国でくすぶって、その速度は芳しくなかった。

彼らはある胡桃(くるみ)の木の生えた家に辿り着き、その主人に水を乞うた。主人は親切にも水を与え、その馬に青い飼葉を与え、彼らの足を湯で清めてやった。

戦いを避けた彼らは砂の吹き荒れる平原や、冷たい霜の降りる土地を歩み続け、その顔は青ざめ、唇は渇いていた。彼らは布を謝礼として主人へと与えた。それは娘が織ったもので、その母の織ったものと比べても遜色のない美しさだった。また、残しておいた穀物を与えた。それは住民たちが幾年かけて選び取った、いっとう実の大きな穂をつける種類だった。主人はふくよかで満たされた掌で彼らの掌を包み、その家に留まることを勧めた。男の側で娘が先刻受けた果物を吐き出した。彼女は身ごもっていた。男は急に、足先から髄に染みわたる寒さを思い出し、その家に留まることにした。その国には、間もなく激しい冬が訪れようとしていた。

彼らはその家で懸命に働いた。男は馬を駆り、遠方まで行商に出かけた。その道程に現れる獣や盗賊の類を彼は見事に射殺し、鳥獣の肉がたびたび食卓に上がった。

娘は高機(たかはた)を繰って美しい布を織った。胡桃の家のご婦人はその出来と、その素晴らしい指を喜んで、娘のことを大層可愛がり、本当の娘のように扱った。胡桃の家の夫婦には子供がなかった。婦人は腹の子を思い、眠るように勧めたが、娘は頑として機を織りつづけ、女中たちと同じように、西向きの部屋で眠った。

近所の娘たちは胡桃の家を訪れて、彼女に教えを乞うたが、その娘ほど上手に布を織る者はとうとう現れなかった。

翌年の晩夏には、とうとう女の子が生まれた。女の子は柔らかい布に包まれ、花を浮かべた水で洗われ、その家の者すべてに歓迎された。村のものはみなで金を出し合ってその子に寝台を贈り、また名高い僧を呼び止めて、その子に祈祷を与えた。

娘は女の子を抱いて、何度も散歩に出た。女の子が家の中でも激しく泣くので、婦人や女中方に気を使ってそうした。時に一時間かかることもあった。庭には胡桃の木があり、合歓の木があり、なだらかな丘があり、遠くには別の家の畑、用水路変わりである小さな川があった。娘は赤ん坊の柔らかな肩に顔を埋め、そのひと時、周りの風景はすっとその影を無くすように、彼女たちの視界から消え去るのだった。温かく、揺れる母親の体の中で赤ん坊は眠り、娘はその眠りを覚まさないように、風のひと群れがすっかり行ってしまうまで、そこへ立ち続けた。男はたびたび、そういう風に二人が散歩するところにちょうど帰ってきた。娘は手を振って、名前を呼んだ。赤ん坊は眠るか、ぼうっと男の顔あるいはどこか虚空を眺めていた。

彼らはそこから一冬をその家で過ごした。女の子は首が座り、目に映るものに笑いかけるようになっていた。胡桃の家の夫婦は彼らを手放し難く、何度も引き留めたが、彼らの南方行きの意志は固かった。胡桃の家の夫婦は、彼らに健康な馬を一頭、村娘の織った布類、干し肉をたくさん与えた。娘と男はまばゆく光の差す朝に出立した。村娘、胡桃の家の夫婦、女中らが手を振って、その姿が丘の向こうへ消えるまで、見送った。

7

春の間は心地よく、途中戦に巻き込まれそうになりつつも順調に進んだが、日増しに雨脚が遠のいて、間もなく酷い干ばつが始まった。昼には人の姿も眩むような激しい砂風が吹き付け、針のように激しい日光が目を打った。稲も麦も枯れ、その大地はひび割れ、しかし税は一層激しく取り立てられた。

彼らは胡桃の家で受け取った食料を少しずつ削り、懸命に歩き続けたが、激しい飢餓の風は国一帯を覆っていた。彼らは草木を食み、泥の浮く川で渇きを癒したが、日を経るごとに痩せ衰えていった。

彼らが水を受けに、ある村の、井戸の側の家屋に立ち寄ると、そこには老婦が眠っていた。老婦は机にうち伏して眠り、唇や瞼が酷く渇いていた。彼らが一椀の水を与えると彼女は目を覚ましたが、目は虚ろで、体をもたげるのも苦しいようだった。

彼女は既に、この村で数少ない生き残りであったから、彼女に話を聞くほかなかったが、しかし彼女の意識は朦朧として、話はとりとめなく移っていった。彼女の言うことにはこうだった。

彼女の息子たちは南の国に衣を売りにいって、いまだに帰らない。彼女はこの家を捨てることもできたが、自分が飢え死ぬことよりも、息子たちと会えないことが恐ろしく、またどこへいくあても、足もなかった。わずかな種籾を食べて暮らしていた。

彼らは自分たちの馬を弑した。その血を集め、皮を剥ぎ取り、肉を切り取った。

その家のかまどには鍋がかけられていた。娘は肉を煮るためにその蓋を開こうとした

が、老婦はそれを押しとめた。わずかに開いた蓋の中には生臭い肉入りのスープが残っていた。

娘はそれを捨てると、馬の血で内側を洗い清めた。次いで馬の肉で鍋いっぱいのスープを作った。娘は老婦の口に汁を運んだ。老婦は瞳に輝きを取り戻し、うち伏した姿勢を解くと、彼らの手に額を擦りつけるように礼を言った。そして、家に残っていた僅かな塩をすべて彼らに与えた。

彼らは椀を携(たずさ)え、同じく飢えに苦しむ他の村人にもスープを与えた。こうして、彼らはその身とわずかな塩と子の他に何をも持たない旅人となった。

老婦は彼らに寝台を貸し与え、彼らはそれを受けた。はや一ヶ月ぶりの柔らかな床だった。女の子は痩せていた。泣く力も失せて、一日のほとんどを寝て暮らしていた。

まもなく馬の肉もなくなるだろうし、この先娘を抱えて行くことは不可能だった。いたずらに生かして、娘の命をさらに削り取って諸共死んでしまうより、いっそここで、自分たちの手で終わらせるほうが苦しみがなかろうと男は勧めたが、娘はそれを固く拒み、女の子を抱きしめるとそのまま眠った。彼らはよく眠った。

8

翌朝、彼らがスープを食べていると、高らかな蹄の音が北から響き渡ってきた。老婦の子供たちの馬だった。

三人の若者は日に焼けた頬を赤く染め、異民族風の衣装に身を包み、鮮やかな赤が日の下できらきらと光っていた。また馬の肌も美しい汗が湧きたつようだった。

若者たちは先の行商から帰る時分、南方はるかにやってきた異民族と衝突し、そのまま捕虜となってしまったが、異民族は彼らをねんごろに扱い、畜肉を使った料理でもてなした。そこには似たような境遇で捕虜となった北の国の者も多くいたが、惨い扱いを受けているものは一人もなかった。生活に慣れてきた彼らは、馬を育てた経験があると言うので、幼い馬の世話に登用した。彼らは命を失う恐怖もあって懸命に働き、異民族の長はたいそう喜んだ。そしてその褒賞として、彼らに上等の服や、十分な休みや、酒を与えた。

自由になった若者たちは、同じく捕虜となった北の国の者に教わって少しずつ言葉を覚え、異民族の間で交わされるいろいろな会話を少しだけ理解できるようになった。北の国との戦いの報だけでなく、その国を襲う激しい飢饉の報をも届いていた。

異民族らの国は決して土壌の豊かな土地ではなかったが、彼らはたくさんの馬、さらにたくさんの国民を手足のように動かし、青い草を追って東西駆け巡りながら暮らしていた。彼らの国には野蛮な相撲や、遠乗り競争、苛烈な戦争があったが、北の国のように重税で苦しむだとか、激しい飢饉に苦しめられるという話はついぞなかった。ただ、北の国にはかの老婦が彼らの帰りを待っていた。

若者たちはその長に、老いた母親を尋ねる許し、この国に住まわせる許しを乞うた。彼らの目は腫れていて、それは馬のお産には一晩眠らずに付き添ったためだった。今朝生

まれたその仔馬は、今や元気に母の父を飲んでいた。長は喜んでそれを許し、彼らに馬を貸し与えた。

若者たちの持ち寄った塩や干し肉や酒、そして馬のスープが食卓に並び、他の村人を呼び出し、ささやかな宴の席が持たれた。皆の頬に色味が戻った。

若者たちは娘と男に深く感謝し、酒と干し肉、一壺ぶんの水を捧げた。彼らはそれを受けた。その宴がいよいよ終わるころ、男は翌朝、彼らとともに村を離れようと決意した。

男が宴の席から寝室に戻ると、娘はちょうど女の子に粥を与え終えたところだった。

娘の頬は長く夜風に洗われ、その薔薇色は青ざめて、豊かな曲線は骨の凹凸を静かに浮かせていた。指は女ながらに節だって、赤ん坊の背中と、頭の後ろを抱きよせていた。富んだ泉の水が枯れて、水底の岩がその鼻梁を黒々と——こちらに手を伸ばすように広がっている、そのような様子に似ていた。

男は彼女の側に座ると、子を青年らに託そうと言った。青年たちは確かにその子供を慈しんでくれるだろうし、この先、腕の中で静かに息絶えるのを待つよりも、よっぽど良いだろう、と。

この年頃の子供はまだ鳥の子供と大差なく、些細なことで命を落とすものだった。男の兄弟もそのように死んだ。とはいえ、それは方便だった。何よりも、男はこの先の、まだ永遠に思えるような命の道行で、その妻を永遠に失うことが恐ろしかった。

女は水底から沸き立つような激情を以て、一瞬彼を睨んだ。

「私が産み、ここまで育てた大切な子は、到底手放せません。私の命と引き換えにでも生かしたいのです」

男は眠る子供を見た。女が身を削って乳を与えたその子供は、母親の生気を吸い取ったように、日々少しずつ、血を吸って膨らむ蛸(ぶよ)のように大きくなるのだ。女は声を荒げて問うた。

「貴方は、この子が可愛くはないのですか。食べるものがないのなら、私の口を減らし、この子に私の肉を食べさせればいいでしょう」

この旅でまた飢えに襲われるだろうことは薄々分かっていた。何せ、今から横断するのは何百里も続く荒野だった。

子は男の方向に手を伸ばした。何も知らず、いたずらに空を切るその小さな指の感触を思い出し、男は怖気を飲み込んだ。

「貴方が決めることに私が力で逆らえようもありません。しかし、私の役目は既に果たされたのです。貴方が、心の底でこの子を嫌っていることを、私は知っていますわ。その上で言うのです」

この先、盗賊に襲われて、荒野の飢えに耐えかねて、病気になって、ささいなほころび一つで——たとえ死なずとも——苦しい思いをするだろうに、女は頑としてそれを拒むのだった。二人は背を向け、別々の寝台で眠った。

9

男が目を覚ましたのは夜明け前のことだった。何気なく窓辺に、壁際に目を巡らせ、ふと娘の寝台に目を止めた。その上を指で何度も探ったが、娘と赤ん坊の姿はなかった。

男は手探りで部屋を飛び出した。残った酒で目の裏が熱く、指や足の先端は自分の物ではないようで、どうにかそれを動かした。炊事場にも居間にも廊下にも娘はいなかった。明けつつある空の下、家を飛び出した。

男は未だ若かった。こうなるだろうことをどこかで予感しながら、しかし女が行ったという事実が、途方もなく、渇きとなって広がり、しかしそれを癒すすべはもうない。彼が地面に膝をついた時、紅玉の太陽が東から上り、辺りは葡萄酒色に染まった。木々や葉の輪郭は、金色の光を零れんばかりに湛え、しかし自分が愛した妻(さい)は、慈しんだ妹(いも)は既に消え失せた。

こうして、楽園は永遠に閉ざされた。

了

【参考文書】

月本昭男訳『ギルガメシュ王の物語：ラピス・ラズリ版』（ぷねうま舎）
荒井献ほか『ナグ・ハマディ文書抄：新約聖書外典』（岩波書店）
長尾雅人責任編集『バラモン教典；原始仏典』（中央公論社）
折口信夫『口約万葉集』（河出書房新社）

奥付

奥付

奥付

案山子　2022 冬・夏合同号
https://puboo.jp/book/133504

著者：新潟大学文芸部
https://puboo.jp/users/sindaibungeibu

電子書籍プラットフォーム：パブー（ https://puboo.jp/ ）
運営会社：デザインエッグ株式会社

案山子二〇二二　冬・夏合同号

著　　新潟大学文芸部

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社